

小倉百人一首

「小倉百人一首」(本文参照)を、初句の五十首順に配列した。白抜き数字は配列順を、その下の数字は歌番号を示す。下の句からも検索できるよう、下段にその索引を掲載した。

| | | |
|----|----|-----------------------------------|
| 1 | 79 | 秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ |
| 2 | 1 | 秋の田のかりほの庵いの苦とまをあらみ 我が衣手ごろもは露にぬれつて |
| 3 | 52 | 明けぬれば暮るものとは知りながら なほ恨めしき朝ぼらけかな |
| 4 | 39 | あさちふの小野の篠原はしのぶれど あまりてなどか人の恋しき |
| 5 | 31 | 朝ぼらけ有明ありけの月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪 |
| 6 | 64 | 朝ぼらけ宇治の川霧はたえだえに あらはれわたる瀬々の網代木 |
| 7 | 3 | あしひきの山鳥の尾のしだり尾の ながながし夜よをひとりかも寝ね |
| 8 | 78 | 淡路島あまぢかよふ千鳥の鳴く声に 幾夜よくねざめぬ須磨の関守せき |
| 9 | 45 | あはれともいふべき人はおもほえで 身のいたづらになりぬべきか |
| 10 | 43 | 逢あひ見ての後の心にくらぶれば 昔は物を思はざりけり |
| 11 | 44 | 逢あふことの絶えてしなくななかに 人をも身をも恨みざらき |
| 12 | 12 | 天つ風雲のかよひ路吹きとぢよ をとめの姿しばしとどめむ |
| 13 | 7 | 天の原ふりさけ見れば春日かかるなる |
| 14 | 56 | あらざらむこの世のほかの思い出に いまひとたびの逢あふこともが |
| 15 | 69 | あらし吹く三室の山のもみぢ葉は たつたの川の錦にじきなりけり |
| 16 | 30 | 有明けのつれなく見えし別れより あかつまばかりゆきものはなし |
| 17 | 58 | 有馬山猪名の笹原は風吹けば いでそよ人を忘れやはす |
| 18 | 61 | いにしへの奈良らの都みやこの八重桜やくら けふ九重このにほひぬるか |
| 19 | 21 | 今來むと言ひしばかりに九月つきの 有明けの月を待ち出でつるか |
| 20 | 74 | 今はただ思ひ絶えむとばかりを 人づてならいでふよしもがな |
| 21 | 63 | うかりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは祈らぬもの |
| 22 | 65 | 恨みわび干さぬ袖さだにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ |

| | |
|-------------------|-------------------|
| 〔新古今・秋上・四三・藤原顯道信〕 | 〔後撰・秋中・三〇一・天智天皇〕 |
| 〔後撰・恋・六七・藤原顯道信〕 | 〔後撰・恋・五五・源 等〕 |
| 〔古今・冬・三三・坂 上是則〕 | 〔千載・冬・四〇・藤原顯道信〕 |
| 〔拾遺・恋・三七・源 兼昌〕 | 〔拾遺・恋・三七・藤原伊尹〕 |
| 〔金葉・冬・三七・源 兼昌〕 | 〔拾遺・恋・三七・藤原敦忠〕 |
| 〔拾遺・恋・三七・藤原敦忠〕 | 〔拾遺・恋・三七・藤原朝忠〕 |
| 〔拾遺・恋・三七・藤原敦忠〕 | 〔古今・雜上・八三・宗貞〕 |
| 〔古今・羈旅・四六・安倍仲麻呂〕 | 〔古今・羈旅・四六・安倍仲麻呂〕 |
| 〔後拾遺・恋・三・吉三・平岡式部〕 | 〔後拾遺・恋・三・吉三・平岡式部〕 |
| 〔後拾遺・秋下・云六・不知因法師〕 | 〔後拾遺・秋下・云六・不知因法師〕 |
| 〔古今・恋・六五・壬生忠良〕 | 〔古今・恋・六五・壬生忠良〕 |
| 〔後拾遺・恋・三・吉三・大司三位〕 | 〔後拾遺・恋・三・吉三・大司三位〕 |
| 〔詞花・春・三九・伊勢大輔〕 | 〔詞花・春・三九・伊勢大輔〕 |
| 〔古今・恋・六九・素性法師〕 | 〔古今・恋・六九・素性法師〕 |
| 〔後拾遺・恋・三・吉三・道雅〕 | 〔後拾遺・恋・三・吉三・道雅〕 |
| 〔千載・恋・二・七八・源 俊頬〕 | 〔千載・恋・二・七八・源 俊頬〕 |
| 〔後拾遺・恋・四・八五・相模〕 | 〔後拾遺・恋・四・八五・相模〕 |

| | |
|----|--------------------------------------|
| 16 | ↑あかつきばり憂きものはなし |
| 15 | ↑逢あはでこのよを過ぐしてよとや |
| 14 | ↑葦あしのまろ屋やに秋風ぞ吹く |
| 13 | ↑あはれ今年の秋もいぬめり |
| 12 | ↑あまの小舟ぶねの網手かなしも |
| 11 | ↑あまりてなどか人の恋しき |
| 10 | ↑あらはれわたる瀬々せの網代木きじろ |
| 9 | ↑有明けの月を待ち出でつるかな |
| 8 | ↑いかに久しきものとかは知る ↓幾夜よねざめぬ須磨月の関守もりせき |
| 7 | ↑いづくも同じ秋の夕暮れ |
| 6 | ↑いつ見きとてか恋しかるらむ |
| 5 | ↑いでそよ人を忘れやはする |
| 4 | ↑いまひとたびの逢あふこともがな |
| 3 | ↑今ひとつたびのみゆき待たなむ |
| 2 | ↑憂うきにたへぬは涙なりけり |
| 1 | ↑憂うしと見し世ぞ今は恋しき ↓おきまどはせる白菊の花 |
| 35 | ↑かけじや束の濡れもこそすれ |
| 34 | ↑かこち顔なるわが涙かな |
| 33 | ↑傾かたぶくまでの月を見しかな |
| 32 | ↑かひなく立たむ名こそ惜しけれ |

下の句から上の 句を引く索引

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|---|---|---|--|------------------------------|--|------------------------------|---|-----------------------------|---|--|--|-------------------------------|--|--|-------------------------------|--|--|-------------------------------|---|
| 47 4 | 46 55 | 45 73 | 43 37 | 42 40 | 41 70 | 39 24 | 38 97 | 36 68 | 35 29 | 33 50 | 31 48 | 30 98 | 29 6 | 28 51 | 27 82 | 26 95 | 25 60 | 24 72 | | |
| 奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の　声聞く時ぞ秋はかなしき 音に聞く高師 <small>たかし</small> の浜のあだ波は　かけじや袖 <small>そで</small> の濡 <small>ぬれ</small> もこそそれ | 大江山 <small>おほさん</small> いく野の道の遠ければ　まだふみも見ず天 <small>あま</small> の橋立 <small>はし</small> | おほけなくうき世の民におほふかな　わが立つ草 <small>くさ</small> に墨染 <small>すみぞめ</small> の袖 | 思ひわびさても生命 <small>いのち</small> はあるものを　さしも知らじな燃ゆる思ひを | かくとだにえやはいぶきのさしも草　さしも夜 <small>よ</small> に雪は降りつつ | かささぎの渡せる橋に置く霜の　白きをみれば夜ぞ更けにける | 風そよぐなら小川 <small>おがわ</small> の夕暮れは　みそぎぞ夏のししなりける | 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ　くだけて物を思ふころかな | 君がため春の野に出いでて若菜 <small>わかな</small> つむ　わが衣 <small>きぬ</small> をともに雪は降りつつ | 君がため惜しからざりし命さへ　長くもがなと思ひけるかな | 来こぬ人をまつほの浦の夕なぎに　衣 <small>きぬ</small> かたしきひとりかも寝つ | きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに　焼くや藻 <small>さわら</small> の身もこがれつ | このたびは幣 <small>ぬら</small> も取りあへず手向 <small>てむけ</small> 山 <small>やま</small> おきまどはせる白菊の花 | 恋してふわが名はまだき立ちにけり　人知れずこそ思ひそめしか | これやこの行くも帰るも別れでは　知るも知らぬも逢坂 <small>おあさか</small> の関 | さびしさに宿 <small>やど</small> を立ち出いでてながむれば　いづくも同じ秋の夕暮 | しおぶれど色にいでにけりわが恋は　ものや思ふと人のとふまで | 瀬を早み岩にせかるる瀧川 <small>たきがわ</small> の　われても未 <small>ま</small> すに逢あはむとぞ思ふ | 高砂 <small>たかさご</small> の尾の上 <small>じょう</small> の桜咲きにけり　外山 <small>ほかさん</small> の霞 <small>かすみ</small> 立たずもあらなむ | 滝の音はたえて久しくなりぬれど　名こそ流れてなほ聞こえけれ | 田子の浦にうち出でて見れば白妙 <small>タキ</small> らの　富士の高嶺 <small>たかね</small> に雪は降り |

| | |
|-----------|---------|
| 古今・秋上・三五 | 猿丸大夫 |
| 金葉・恋下・四九 | 紀伊 |
| 金葉・雜上・五〇 | 小式部内侍 |
| 千載・雜中・二三〇 | 慈円 |
| 千載・恋二・八へ | 道因(法師) |
| 後拾遺・恋一・六三 | 藤原家隆 |
| 新勅撰・夏・一九 | 藤原家隆 |
| 詞花・恋上・三二 | 源重之 |
| 古今・春上・三 | 君皇 |
| 古今・春上・三 | くわからてむわ |
| 後拾遺・恋三・六九 | 藤原義孝 |
| 新古今・秋下・二九 | 良経 |
| 古今・秋下・二七〇 | 河内躬恒 |
| 後拾遺・雜一・八〇 | 院定家 |
| 新勅撰・恋三・八九 | 藤原定家 |
| 古今・恋三・五九 | みづのたなみ |
| 拾遺・恋一・六三 | 壬生忠見 |
| 後撰・雜一・一〇九 | 蝶丸 |
| 後拾遺・秋上・三三 | 良温(法師) |
| 拾遺・恋・六三 | 平昌盈 |
| 後撰・秋中・三八 | 文屋朝康 |
| 古今・恋三・五九 | 藤原敏行 |
| 詞花・恋上・三五 | 猿徳院 |
| 後拾遺・春上・三〇 | 大江匡房 |
| 拾遺・雜上・四四九 | 藤原公任 |
| 新古今・冬・六五 | 山部赤人 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|--------|--------|---------|---------|---------------|---------------|-------------|-----------------|-----------------|---------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----|
| 33 | 46 | 43 | 73 | 15 | 29 | 53 | 50 | 23 | 34 | 67 | 36 | 18 | 97 | 61 | 79 | 54 |
| ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ |
| 外山 | までの霞 | かすみ立たず | ただのこれる | たつたの川の錦 | にぎりけり | つらぬきとめぬ玉ぞ散りける | 忍のぶることの弱りもぞする | 声聞く時ぞ秋はかなしき | 衣ころもかたしきひとりかも寝む | 衣ころもはすてふ天あまの香具山 | さしかるべき夜半のは月かな | けふ九重へにほひぬるかな | 雲居るまがふ沖つ白波 | 霧立ちのぼる秋の夕暮 | からくれなるに水くるとは | |
| やまと | かすみ立たず | あらなむ | これる | にぎりけり | ひとりかも寝む | らむ | ゆゑなりぬる | うらまき | ゆゑにまくら | やかく | はよ | こな | をあらはら | らむ | るかな | |
| ながながし夜よ | ひとりかも寝む | るかな | かな | かな | うらまき | うらまき | かな | かな | うらまき | うらまき | はよ | けふ | くだけて物を思ふころかな | くだけて物を思ふころかな | くだけて物を思ふころかな | |

立ち別れいなばの山の峰に生おふる まつとし聞かば今帰り来こむ
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍のぶることの弱りもぞす
誰をかも知る人にせむ高砂ひかの 松も昔の友ならなくに

49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99

契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり
切りきなかたみに袖そをしほりつ 末の松山波越さじとは
ちはやぶる神代かみさかず竜田川がたつた からくればみなみに水くくるとけ
月みればちぢに物こそかなしけれ わが身ひとつ秋にはあらねど
つくばねの峰より落つるみな川 恋ぞもりて淵となりぬる
ながからむ心も知らず黒髪の 乱れて今朝は物をこそ思へ
ながらへばまたこの頃やしのばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき
嘆きつひとり寝る夜の明くる間は いかに久しきものとかは知
なげけと月やは物を思はする かこち顔なるわが涙かな
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいづこに月宿るらむ
名にしおは逢坂山あふさのさねかづら 人に知られてくるよしもが
難波ワ江なほの草あとのかりねのひとよゆゑ みをつくしてや恋ひわたる
難波浪花なほみじかき草あしのふしの問も 逢あはでこのよを過ぐしてよ
花誘ふ風嵐らの庭の雪ならで ふりゆくものはわが身なりけり
花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに
春過ぎて夏來きにけらし白妙タエの 衣ころもはすてふ空の香具山やま
春の夜の夢ばかりなる手枕まくらに かひなく立たむ名こそ惜しけれ
ひさかたの光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ
人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香かにほひける
人もおし人もうらめあしひきなく 世を思ふゆゑに物思ふ身は
吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしと言ふらむ
はとときす鳴きつる方かなをながむれば ただ有明けの月ぞのこれる
御垣守みりや衛士あたく火の夜は燃え 昼は消えつつのをこそ思へ

| | |
|----|------------------|
| 85 | ↑流れがれもあへぬもみぢなりけり |
| 47 | ↑名こそ流れてなほ聞こえけれ |
| 3 | ↑なほ恨めしき朝ばらけかな |
| 81 | ↑ぬれにぞぬれし色は変はらず |
| 76 | ↑花よりほかに知る人もなし |
| 21 | ↑はげしかれとは祈らぬものを |
| 70 | ↑花ぞ昔の香方にほひける |
| 91 | ↑闇ねやのひまさへつれなかりけり |
| 91 | ↑人こそ知らね乾かく問もなし |
| 94 | ↑人こそ見えね秋は来きにけり |
| 39 | ↑人知れずこそ思ひそめしか |
| 82 | ↑人づてならいでふよしもがな |
| 20 | ↑人には告げよ海人あまの釣舟 |
| 95 | ↑人の命の惜しくもあるかな |
| 86 | ↑人目ひとも草もかれぬと思へば |
| 62 | ↑人に知られでくるよしもがな |
| 11 | ↑人をも身をも恨うみざらまし |
| 74 | ↑昼は消えつつのをこそ思へ |
| 48 | ↑富士の高嶺たに雪は降りつつ |
| 25 | ↑ふりゆくものはわが身なりけり |
| 78 | ↑ふるさと寒く衣ころうつなり |
| 49 | ↑まだふみも見ず天あまの橋立たせ |
| 51 | ↑まつし聞かば今帰り来る |
| 49 | ↑松も昔の友ならなくに |
| 3 | ↑三笠かかるの山に出いでし月かも |

みかの原わきて流るるいづみ川 いつ見きとてか恋しかるらむ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

見せばやな雄島おきしまの海人あまの袖そでだにも ぬれにぞぬれし色は変はらず 〔千載・恋・四・六・殷富門・大輔〕

みちのくしのぶもぢずり誰だなゆゑに 亂れそめにし我われならなぐに 〔古今・恋四・三・源・融〕

村雨むらあめの露もまだひぬまきの葉に 霧立ちのほる秋の夕暮れ 〔新古今・秋下・四三・藤原・雅経〕

めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに 雲くもがくれにし夜半よの月かな 〔新古今・雜上・四九・源・融〕

ももしきや古き軒端こしはたのしのぶにも なほあまりある昔なりけり 〔新古今・秋下・哭・源・融〕

もろともにはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし 〔金葉・雜上・五三・行尊〕

やすらは寝ねなましものを小夜よふけて 倾かたぐくまでの月を見しかな 〔後拾遣・恋三・六・源・融〕

八重律やえぢゆつ茂れる宿のさびしきに 人こそ見えね秋は來きにけり 〔後拾遣・恋三・六・源・融〕

山川さんかわに風かぜのかけたる樹がらんは 流ながれもあへぬもみぢなりけり 〔後拾遣・雜下・二三・順徳院〕

山里は冬そさびしさまざりける 人目ひとのも草もかれぬと思へば 〔後拾遣・雜下・二三・順徳院〕

夕されば門田かどの稲葉おとづれて 葦あしのまろ屋やに秋風ふ吹く 〔後拾遣・雜下・二三・順徳院〕

由良ゆらのとをわたる舟人ふなひとかぢを絶だえ 行方ゆきかたも知らぬ恋の道かな 〔後拾遣・雜下・二三・順徳院〕

世の中は常にもがもな渚なぎさこぐ あまの小舟おとねの綱手つなかなしも 〔後拾遣・雜下・二三・順徳院〕

世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥おくにも鹿しかぞ鳴くなる 〔後拾遣・雜下・二三・順徳院〕

夜もすがらもの思ふころは明けやらで 閨ひなのひまさへつれなかりけり 〔千載・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

夜をこめて鳥のそら音ねははかるとも よに逢坂おさかの閻えんせきは許さじ 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

わが庵あわいは都みやこのたつみしかぞすむ 世をうち山と人はいふなり 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

わが袖そでは潮干しおに見えぬ沖おきの石の 人こそ知らね乾かわく問きまもなし 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

忘らるる身をば思はず誓ちかひてし 人の命の惜しくもあるかな 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

忘れじの行く末すえまでは難なかなければ 今日を限りの命ともがな 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

わたの原漕はらくわぎいでて見ればひさかたの 雲居うきよにまがふ冲なみつ白波しらなみ 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

わたの原八十島やしまさかてて漕くわぎいでぬと 人には告げよ海人あまの釣舟つりふな 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

わびぬれば今はたおなし難ひがはなる みをつくしても逢あはむとぞ思ふ 〔新古今・恋二・一〇七・曾祖好忠・惠法師〕

小倉山をくま峰のもみぢ葉は心あらば 今ひとたびのみゆき待たなむ 〔拾遺・雜秋・二三・藤原忠平〕

↑みそぎぞ夏のしるしなりける 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑乱れそめにし我われならなく 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑身のいたづらになりぬべきかな 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑みをつくしてや恋ひわたるべき 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑昔は物を思はざりけり 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑むべ山風やまかぜをあらしと言ふらむ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑ものや思ふと人のとふまで 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑紅葉もみじのにしき神のまにまに 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑もれ出だいづる月の影のさやけさ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑焼くや藻塙さわゆの身もこがれつつ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑山の奥おくにも鹿しかぞ鳴くなる 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑行方ゆきかたも知らぬ恋の道かな 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑夢の通とおひ路じ人目ひとよくらむ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑吉野よしのの里に降れる白雪 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑よに逢坂おさかの閻えんせきは許さじ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑世をうち山と人はいふなり 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑世を思ふゆゑに物思ふ身は 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑わが立たつ袖そでに墨染すみぞめの袖そで 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑わが身ひとつ秋にはあらねど 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑我が身世にふるながめせしまに 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑われても未まに逢あはむとぞ思ふ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

↑をとめの姿すがたしとどめむ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

12 45 26 26 ↑わが立たつ袖そでに墨染すみぞめの袖そで 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

55 66 27 32 ↑わが衣手きてでも雪に露にぬれつ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

2 2 ↑我が衣手きてでも雪に露に露にぬれつ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

93 93 71 71 ↑世を思ふゆゑに物思ふ身は 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

92 92 5 5 ↑吉野よしのの里に降れる白雪 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

93 93 93 93 ↑よに逢坂おさかの閻えんせきは許さじ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

94 94 93 93 ↑世をうち山と人はいふなり 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

95 95 93 93 ↑世を思ふゆゑに物思ふ身は 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

96 96 93 93 ↑わが立たつ袖そでに墨染すみぞめの袖そで 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

97 97 93 93 ↑わが身ひとつ秋にはあらねど 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

98 98 93 93 ↑我が身世にふるながめせしまに 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕

99 99 93 93 ↑われても未まに逢あはむとぞ思ふ 〔新古今・恋一・九六・藤原・雅輔〕